ある字術士かく語りき

江宮猫衛門

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ある字術士かく語りき

【Ｎコード】
Ｎ７９９３Ｚ

【作者名】
江宮猫衛門

【あらすじ】
南彼方は高校二年生。彼女なし、両親はすでに死去。両親の遺した十手を手にしたとき、彼の運命がようやく動き始める……。
文字の力を知り、それを解放する能力「字術」をめぐり、渦巻く陰謀に巻き込まれていく少年を描いた、ライトノベル風異能力系学園アクション娯楽作品。

序章　独白・南彼方（前書き）

初投稿作品。
プロローグです。なるべく早く第一章も投稿します。

序章　独白・南彼方

序章　独白・南彼方

いってきます、の声は、誰もいないマンションの部屋に空虚に響いた。
コンビニで買って、教室で食べた朝食は、いつもより空虚な味がした。

母親が急死したのは一週間ほど前。
勤め先から帰ってくる途中、乗っていたバスが交通事故に巻き込まれたそうだ。
葬式だ相続だとばたばたしていたら、あっという間に喪があけた。

久しぶりの学校。
気を遣ったのか、話し掛けてくる人はほとんどいない――
「うーっす！」
かと思いきや、そうでもなかった。
「おう、おはよう」
いつも通りに挨拶。
「あ、南おはよう。はいこれ。休んでた間のノート」
「お、助かるわマジで。さんきゅー」
いつも通りのやりとり。
心の空虚さを隠して。

だがそこにあるのは、虚しさだけではない。

母親の遺言書のことが、頭から離れない。
……そこに書かれていたことを、あなたなら信じられるだろうか？

――我が息子、彼方へ。
――全財産はあなたに相続します。
――父さんはもういないし、頑張って暮らしてください。
――ひとつ、あなたに隠していたことがあります。父さんと母さんを許してください。
――あなたは、字術士。文字の力を知り、それを解き放つ者――

序章　独白・南彼方（後書き）

初めて投稿する作品のため、至らない点も多くあるかと思います。
ご意見、ご指摘、ご感想などお待ちしています。

第一章　朱雀、あるいは十手と筆の話

第一章　朱雀、または十手と筆の話

字術士。

初めて聞く言葉だった。

母さんの遺言書に同封されていた手紙は、便箋5枚にも及ぶ大作だった。

遺産の話から親族の話からあったあとで、字術の話が書いてあった。

曰く。字術士とは、文字に秘められた意味を理解し、それを解放することのできる人のこと。江戸末期、南朱雀、東田青竜、西野白虎、北島玄武の四人の書家・学者たちが創り上げた、まさに魔法のような技術、だそうだ。

例えば、念を込めながら木片に「火」と書けば、その木片は燃え上がる――みたいな、らしい。

で、その開祖四家――って書いてあった――のうち、南の血を俺は引いているそうな。

親父は俺が二歳の頃に死んだ。病死、と聞いている。手紙によると、親父は字術士、母さんはただの書道家、だそうだ。

そして、母さんの手紙は、次のように締めくくられていた。

――母さんの部屋の桐の箪笥の、右上の引き出しの中にある金属片と、あなたのゲームソフト入れのアクリルケースの奥にある金属片を組み合わせて、母さんの部屋の金庫を開けなさい。きっと役に立つ。

――頑張ってね。

指示長いよ、とか。
何を頑張るの？　とか。
いろいろ言いたいことはあるけど。
とりあえず俺は、生前、母さんの部屋だったところへ向かった。

……というのが、昨日までの話。
今はぼんやりと六限目、数学の授業。
五月の空気は頭をぼんやりさせるが、今日はいつもよりそれがひどい。
そんな感じで、今日の授業が終わる……。

放課後。というか、ホームルーム直後。
「南くん」
「あん？」
机の中の物をかばんに収めていた俺は、後ろから声をかけられ、振り返る。
声の主は東田波奈。クラスメートだったはず。才色兼備、加えてなんか家はものすごい金持ちのようで、恐ろしく広い日本屋敷に住んでいる。ご令嬢、という表現の似合う黒髪美少女で、口数は少なめながら信奉者というかファンが多い。非公式ファンクラブが存在するくらいだからな……。
で、そんな東田さんが、俺に何の用でしょうか？
「今日の放課後、お時間ありますか？」
ざわ、という効果音が聞こえた。気がした。
「え、……あ、おう。大丈夫だけど」
「じゃあちょっと……うちに来てくれませんか？」
ざわ、ざわ。教室中がざわめいている。なんだこれ。福本漫画かよ。

俺はというと、思わず絶句。さて、これはなんだろう何フラグだ？
「……だめ？」
「いや全然。いつでもＯＫっす」
即答してしまった。美少女恐るべし。
「じゃあ六時半に迎えに参ります……あ、お夕食はこちらで用意いたしますので……」
では、言うと、東田は踵を返し、平常運転の毅然とした足取りで教室をあとにした。
「おい、南！」
「んだよ」
絡んできたのはチャラ目の軽音部員、中田健太。普段からつるんでいるが、見た目に反して義理堅く、悪い奴ではない……はずだ。
「お前、いつから東田さんとそんなに仲良くなったんだ！」
ああ、忘れてた。
ファンクラブの創始者の一人じゃないか、こいつは。
そうだそうだ、と聞こえてくる。野次馬、さっさと散ってくれ。
「別に、しらねーよ。今までほとんど話したことなかったくらいだし」
「じゃあなんで！　なんでいきなりお家にご招待だなんて！」
「俺が聞きてーくらいだよ……頭痛いから帰るわ。じゃーな」
「おい、南！」
無視。周りの人間を、好奇の視線を向けてくるやつもそうでないやつも、全部無視。こいつら、俺が喪があけたばっかだってこと、忘れてんじゃねーのか？　気を遣えって訳じゃないけど、俺だってまだ本調子じゃねーんだ。

そんなこんなで、帰宅。学校から自転車で十五分。
鞄を放り出し、畳敷きの自室に寝転がる。……十秒ほどで上半身を起こす。

机の上に、昨日発見した二つの金属片がある。組み合わせると、確かにぴったりくっついて、鍵になったのには驚いた。
しかしなぜか金庫を開ける気にはなれず。
そのまま放ってあったのだ。
「だけど……遺言だしなあ……」
どうすっか……開けるか。開けまいか。
しばらく考えた後で制服を脱ぎ、あとで出かけることも考えてジーパンとあまりよれていない黒のパーカーに着替え、母さんの部屋へ移動。
金庫は窓際の棚の下段にあった。鍵穴に鍵をさ差し……回す、回った。開ける。
桐……かな？　の箱が一つ、ぽつんとおいてあった。
箱をそーっと取り出し、リビングへ。テーブルに箱を乗せて椅子に座る。
さらに何か仕掛けがあるのかとも思ったが、フタを持ち上げるとあっさりと開いた。中身は……、
「何これ。……十手、ってやつ……？」
二またになった金属の棒。一方が長く一方が短い。握りの後ろには一房の毛と赤い石がくっついている。およそ高校生活どころか、現代日本での生活に一切縁がないであろう存在。
箱の中に、紙が一枚あるのに気がついた。
「えーっと……『父さんの形見です。肌身離さず持ち歩きなさい。母より』……意味わかんね……」
頭を抱え、テーブルに突っ伏す。なんで持ち歩くんだ、十手を。普通要るか？　十手だぜ、十手。わっけわかんね……。
突っ伏したまましばらく黙っていてみた。俺しかいない家の中、テレビもついていない。静寂というのがしっくりきすぎる。不気味なほどの静けさ。時計の針の音や家電のわずかな駆動音がやけに響いて聞こえる。

そしてそれを、破る存在は突然やってくる。

ぴんぽーん、と。インターホン。

「はい」

「東田です。迎えに……来ました」

「あ、ああ、はい。今、下に行くよ」

受話器を置く。

鍵と財布をポケットに突っ込み、しょうがないから十手を腰の後ろでベルトに差して一応パーカーで隠す。ハイカットのスニーカーを履いて、カギをかけてから一応確かめる。

マンションのエントランスをくぐると、黒塗のリムジンが止まっていた。

「ちょ……」

運転席のドアが開いて、黒服のスマートな青年が降りてきた。

「南彼方さまですね。こちらへ」

後部座席のドアを開けてくれた。なんというか、これは……。

「あ、ありがとうございます……」

乗り込む。後部座席の奥には東田波奈、その人が座っている。なんというかやっぱ美少女だ。しかも私服だ。うわやばいめっちゃ可愛い。どうする俺。どうしちゃうのよ！？

いや、どうもしないけど……。

車が発進。しばらく進んだころ、東田が口を開いた。

「今日は、急にすみません」

「いや……別に、晩飯、自分でつくるのめんどいし。むしろ助かった」

「そうですか……。……この度は、ご愁傷さま」

「いやいや、いいって、気を遣わなくて。フツーにしてほしい」

「普通……」

「うん」

「そうですか……」
それから屋敷に到着するまで、東田は口をきかなかった。
俺、なんか悪いこと言ったのか？

夕食。
父上はちょっと忙しいから、と言われて、二人で夕食。和食。豪勢。普通に料理屋で食うようなものだった。
そして今。
ここは旅館か？　と聞きたくなるような広い広い風呂に独り浸かっている。
効果音としてはそう、カポーン、って感じだ。わかってもらえるか？
さて。
考えるのはやはり親のこと。そして字術のこと、あとは東田のこと。
父親は俺が二歳の頃に他界。母親の手紙によると、字術士だったそうだ。でも俺はよく覚えてない。
母親は、そこそこ名の知られた書道家。その影響で、俺も時々書を書いたりはする。普段の字はすごい雑だが、筆を握ると別人だと言ったのは誰だったか、小学校の時の先生かな。んで、その母親は先日、交通事故により他界。
字術。よくわからん。割愛。
東田。確か、母さんの手紙の中の、開祖四家に名前が入っていた気がする。これは偶然だろうか？
まあとりあえず。
「そろそろ上がるか……」
ガチャッ
「お湯加減は……？」
「のおおおおおおおっ！」
東田波奈、降臨。

「ちょ、おま、東田！　急に開けんじゃねえ！」
「え、あ、すみません……」
「ゆ、湯加減なら大丈夫だ、すごいいい感じ。うん。だからもう……」
「お背中流しましょうか？」
「すいませんでした！」
水中で土下座の勢いである。俺、何かしたんだろうか。嬉しいが素直に喜ぶのはまずい気がする！
「い、いや、遠慮しとくわ。もう上がるし」
「そう……」
扉を閉めて出ていく東田。
「危機は去った……、か？」
湯あたりする前に上がるとしよう。全身がやたら熱いので。

なんと着替えが用意してあった。インナー類と、浴衣。
旅館か、と内心で突っ込みながらもおとなしく着る。ちなみに浴衣とかの和装の着付けは俺の数少ない特技の一つ。十手はしかたないので、帯に差した。
客間に戻ると、なぜか東田と、にやにやしたオッサンがいた。
「お、来た来た。南彼方くん、だね」
「え、あ、はい」
「俺は東田家当主、東田汰浪。よろしく頼むぜ、南家当主さん」
「と、当主……？」
「おやおや、まさか知らんとは言わないだろう？　俺もキミも、字術開祖四家の血を正当に継ぐ者。先代・南猛亡き今、キミのみが南の生き残りだ」
ああ……母さんの手紙のアレか。
あれは……本当だったんだな……。
んで……一体俺はどこへ流れていくんだ？
「ということは、父さんと知り合いですか？」

「知り合いも何も、長いこと共闘したよ。良い呑み友達だったしね」
「はあ……」
「それにしても、あいつが殺されてもう十五年……」
「そうですね……ん？」
今なんか、流しちゃいけないワードを聞いた気がする。
「殺されて……？　父さんは、病死じゃなかったんですか？」
「ああ、うん。違う。あいつは殺されたんだ。開祖四家のひとつ、西野によってね」
さすがに思考停止。
え、これはあれですか。病死だと思っていた父親が、実は悪の組織の陰謀で殺されていたのでした的なにかか。
そうかそうか、大変だなあ。
――って流せるか！

そこからの話は長くなった。
話し終えたときには、日付も変わっていた。客間で横になってもしばらく眠れなかった。

まとめるとこんな感じだ。
西野家には野望があった。開祖四家の持つ「宝珠」をすべて集め、他の三家を根絶やしにすることで、西野家が字術の頂点に立つ。すでに北島家は攻撃され、宝珠を奪われ、当主は行方不明だそうだ。
父さんは襲撃を受けて命を落としたが、宝珠は奪われずに済んだとか。俺は字術に触れてこなかったので、西野の監視からは漏れているのが現状らしい。
字術のこと。この十手は「筆」と言って、字術士の力を強化するアイテムだそうだ。各家に一つずつ伝わる、大切なものらしい。
そして最後に。明日――いや、すでに今日か――から俺は、字術を教わることになった。素養のある者ならすぐ使えるようになるらしいが、さて、俺はどうなんだろう？

翌朝、午前七時。
「やっべ、忘れてた……」
今日は金曜日。
学校じゃん。
とりあえず、家に帰ろう。
「しかし……」
東田に何も言わないわけにもいかんな。
と、そこへ東田登場。というか、唐突に襖が開いたらそこにいた。
「おはようございます」
「お、おはよう」
「朝食は摂られますか？」
「あ、ああそれなんだけどな、昨日は忘れてたけど、今日学校じゃん。だから一回家に帰って、と思ったんだよ。なんかごちそうになってばっかりで、悪い気もするしさ」
「そうですか、わかりました。ではすぐに車を手配しますね。あ、その浴衣は差し上げますので……」
では、と言って襖が閉まった。

中略。学校に到着。
略した部分は、家に帰って制服に着替え、かばんに教科書類を突っ込み、母さんの遺影に一応挨拶して、自転車を飛ばしてきたってところだ。面白みはない。
教室で朝食用の総菜パンをもそもそと食う。一人の食事はやはり味気なく感じる。
今日の放課後、再び東田邸にお邪魔し、字術を基礎から教えてもらうことになっている。十手は布の袋に入れて鞄の中にある。
いろいろなことがありすぎて、今日も授業に集中はできなかった。

今度の試験、若干まずいかもしれんな、なんて考えつつ。

第一章　朱雀、あるいは十手と筆の話（後書き）

初めて投稿する作品のため、至らない点も多くあるかと思います。
ご意見、ご指摘、ご感想などお待ちしています。

第二章　鍛えてますから

第二章　鍛えてますから

細くしなやかな指先に光が灯る。
光の描く軌跡が文字を形作る――
「『火（カ）』」
東田の声に合わせ、光の軌跡が炎に変わり、地面に置かれた木片に着火した。
小さくとも、赤々と燃える炎。
「これが、字術……」
「ええ。この動作が字術の基本になります」
「ははあ……」
なんつーか。
ははあ、としか言いようがねえ……。
とんでもない技だなこれは。ってか俺にもできんのか？
東田に聞いてみると、
「できますよ」
との答え。本当かよまったく……。
曰く、字術士の血が流れていれば、強弱はさておき、字術を使うことはできるのだそうな。
とりあえずやってみることに。
「えーっと、まずは？」
「まずは、指でやってみましょうか。右手の人差し指を出してください」
言われた通り、指を一本立てる。
「その指は、筆です」
「筆？」
大分唐突な宣告。筆……か。

「はい。あ、毛筆はお好きでない？」
「いや、むしろ好きだけど……」
でもやっぱ、指イコール筆って。ちょっと無理があるような。
「字術において筆といえば、字術発動のために文字を書く物のことを指すので」
「なるほど。要は、この指で字を書く、って意識に持っていけと」
「はい。正解です」
なるほどねえ。
さて。集中集中。右手人差し指に意識を持っていく。俺は今から、ここで字を書く。この指が俺の筆……。

徐々に徐々に、指先にぼんやりとした光が集まってきた。お、すげえ。
「まだです。集中を切らさないで」
東田の声に、再度集中。
筆、筆、筆……。
光はなかなか強くならない。ぼんやりと明滅を繰り返すのみ。
いつも毛筆で字を書く前、俺は何をしていたっけ？
墨をつけて……そうだ。硯で余分な墨を落とし、筆の先を整える。
右手人差し指が筆なら、左手を硯にしてやればいい。何となく、普段やっているような動作を両手で再現するようにする。
「……はい、大丈夫です」
東田の声。光はさっきよりずっと強くなり、安定している。
「そのまま、空中に字を書きます。“そらがき”、小学校の漢字練習なんかでもやりますね。あんな感じです」
「なるほど」
確かにそんなこともあったなあ。
「今回はさっきと同じ、『火』にしておきましょう。そんなに大きく書かなくていいですから」
右手を伸ばし、空中に火という漢字を書く。しかし、これが難し

い。
　まず、一画書くごとに自分の中からエネルギーが流れ出していく感じがする。それどころか、実は指に光を集めておくだけで驚くほど消耗する。そして、書いた軌跡に意識を向けておかないと、すぐに光が消えてしまう。
　結局、何回も書き直しを経て、ようやく形になった。へろへろの筆致で、なんだか頼りない火だ。
「発動の引き金は、その字を読み上げることです。音読みで、どうぞ」
「おう……いくぜ、『火（カ）』！」
　瞬間、光の軌跡が炎に変わる。重力に従うように、落下。木片に燃え移る。
「上出来ですね……『鎮（チン）』」
　東田が一瞬で字を書き、火を消す。鮮やかな筆遣い。なるほど、これが鎮火か。
「しかし……こりゃきっつい……」
「ええ。あ、座ってていいですよ」
　言われるままにその場にへたりこむ。いやな汗でびっしょりだし、足はがくがくだしで、散々な状態である。情けねえ。
「字術は、術士の魂のエネルギー、といいますか、そんな感じの物を消費します。俗に言う、魔力、霊力、オーラ、チャクラなど、そんな感じです。我々は“呪力”と呼んでいますが」
「ああ、なるほど」
　さっき流れていくのを感じたのはそれか。
「たぶんそうですね。それにしても、初めて字術を使ったのにこの威力を保てるとは正直、思いませんでした。それどころか、この三時間ほどで一文字書けるようになるとは。さすがにご嫡男……」
　逆にびっくりだ。すでに三時間も経っていたのか。時間の感覚が完全になかった。
「いや、すまん。そんなに長いこと付きあわせてたなんて、気づか

なかった。それに、さっきできたのもお前の教え方が上手いからだって」
「いえ、これはほとんど素質の問題ですね」
そんなもんか……？
そんなに褒められると、照れるより不安だ。
「話の続きですが、呪力は消費されます。ゲームの話でわかりやすく例えますと、ええと、術を使うと“えむぴー”というのが足りなくなって回復アイテムを使わないといけない、みたいな感じ……だそうです」
なんで一部カタコトなのかは、聞かないほうがいいんだろうか。
まあいい例えだと思うが。
「確かにわかりやすいな。んで？　どうすれば呪力は回復するんだ？」
「はい、休養と食事ですね」
「簡単だな……」
「ええ。ですが、最初は呪力の回復の上限が低いです。これは慣れですね。慣れれば、かなりの呪力を蓄えておけるようになります」
「レベル上がって、ＭＰ上限が上がるみたいなもんか……」
「よくわかりませんが、たぶんそんな感じです」
とりあえず、今日の鍛錬はここまでということになった。

かぽーん、と言えばもうおわかりだと思うが。
鍛錬のあと、風呂に入った。
一人でだがな。
今日は替えのＴシャツとズボンくらい持ってきたので、風呂上がりはそれを着た。
で、夕食。めっちゃ旨いカレーを、東田とお手伝いさん一人（咲さん、十九歳、女性）と、計三人で食べた。
このカレー、咲さんが作ったそうなんだが。
そこらのファミレスどころではない旨さで。

すごいですね、めっちゃ旨いです、って言ったら
「仕事ですから」
って言われた。なんか、それで別にいいんだろうけど釈然としなかった。

就寝。昨日と同じ部屋。十時くらいには布団に入ったが、なかなか寝つけず。たぶん、あり得ないものをこの目で見、あり得ないことをこの手で起こした、その反動だったのだろう。
布団のうえで胡座をかき、ぼんやりとして過ごす。
時計を見るともなしに見る。間もなく日付変更、ってところか。
唐突に襖が、音もなく開く。そちらを見ていなかったら気づけなかった気がするレベルだ。
「おーい彼方くん」
「びっくりした……なんですか？」
東田（父）、登場である。
和服姿（デフォルトらしい。似合う）の東田家当主は、左手で手招き。
「ちょっとおいで。あ、十手持ってきて」
「は、はあ……」
ぶっちゃけ超怖いんですけど。
暗くて表情見えないし。
当主の後について、中庭。昼間、字術を初めて使ったところ。五月とはいえ、深夜の屋外はすこし肌寒い。
「いい月だねえ……」
なんか上機嫌で月を見ていらっしゃるんですけど。
「あ、あの……」
「彼方くん、どうだい？」
「な、なにがですか？」
「娘だよ」
「……どう、とは？」

「波奈はあの通りの性格でね、友達も多くないとは思う」
「え、ああ……はあ……」
正直、否定要素はない。
俺は彼女が笑うところを、誰に対してのものも見たことがない。
確かに昼休みとかも、一人で昼飯を食べて本を読んでいる。
「ああ、気を遣わなくてもいいよ。……僕はこんなちゃらんぽらんだが、嫁と母がうるさい人でね。波奈もその二人にしつけられて育ったわけで……」
「なるほど……」
「そこでだよ、彼方くん」
「はい」
「波奈と仲良くしてやってくれないか？」
「え、あ、ああ、そういうこと、か……。というか俺はもうすっかり友達のような気でいましたけどね……よく考えると、今までろくにしゃべったこともなかったんですね」
完全に盲点だった。
字術がなければ、接点はなかったんじゃないだろうか、って話である。
「じゃあよろしく頼むよ」
「はあ……」
「さて……じゃあやろうか、夜の鍛錬」
「へ？」
「波奈は字術の基礎を教える。僕は君に、字術を用いた戦闘術を教える」
「はあ」
初耳なんですけど。
「それじゃ行くよ。構えて」
いつの間に取り出したのか、東田家当主サマはなぜか抜き身の小太刀を構えている。
「ちょ、ちょっと」

「ルールは簡単、相手の首筋に得物を突き付けて『王手』とか『チェックメイト』と発声すれば勝利。あ、お互いに殺さないようにしよーね」
「いやいやそんな軽い感じで言われても……って！　あっぶね！」
「ほー、今のをかわすか。なかなかやるね」
結構ためらいなく突き出された剣先をかわし、あわてて距離をとる。

やばい。
これマジでやばい。

全身から嫌な汗が噴き出す。じっとりとした手で、十手を握り直す。
十手は本来、犯罪者を無力化するための武器。打撃武器だが、剣を破壊するバスタードソードの一種とも言える。剣を【絡めとる】という動作が可能な、特殊な武器だ。
次の一撃に備え、呼吸を整える。
しかし、東田さんの次の行動は、俺の予想をはるかに超えたものだった。
右手に小太刀。左手の指先には光がある。その光が閃き、意味を持つ記号となる。
その意味するところは――
「『風（フウ）』！」
左手で宙に描かれた字が発光、俺をめがけて局地的な突風が吹く。
漆喰の壁に思い切りたたきつけられ、絶息する。
「……ぐ……」
「おいおい、これは字術士同士の喧嘩だぜ？　それぐらい予想できなかったわけじゃないよな？」
「く……そ……」
なんだこれは。字術って、喧嘩で刃物よりタチが悪いぞ。いやも

うこの人、刃物もってるけどさ。そして威力がチート級じゃねーか。
片膝立ちになり、十手で次の一撃を受け止める。金属音が、夜の庭に響き渡る。
もう一撃。もう一撃。恐怖心が十手を動かし、ほとんど反射的に防ぐ。
次の瞬間、どうっ、と思いもよらぬ一撃が来た。
すなわち、膝蹴りが俺の腹につき刺さったということ。
痛みより衝撃が先行し、視界が一瞬だけ暗転。目を開くと俺は空を仰いでおり、首筋には鋭い切っ先。
「王手」
「……ありません……」

翌朝。
廊下で寝ていたら、東田に揺り起こされた。
「風邪を引きますよ？　どうしてこんなところで……」
「いや……」
夜の鍛錬のこと、言わない方がいいんだろうか？
「……部屋に……たどり着けなくて……」
東田の頭上に疑問符が見えたのは、気のせいじゃないはずだ。

「離れ、って……離れ？」
朝食の席。東田父、東田母、東田、そして俺というなんとも俺だけ浮いた布陣で、食堂にいる。
「おう。庭の奥にあるだろ。昔はお前の親父の家出用だったんだけどな。あそこに住んだらどうだい？」
「住み込みで……鍛錬……」
「そういうこと」
昨夜を思い出し、ちょっと
「そういうこと」。
気を取り直して。ませんよ。あ、今は叔父が面倒みてくれてるん

金銭面とかで、そっちに連絡さえしてくれればたぶん……」
「そうかい、了解したよ。……いいよな？　叶美」
「構いませんが……」
ふと、現代文の授業を思い出す。
逆接の後が一番怖い。
「先に、筆者の言いたいことが来るになっていたのですが……」
が？
「……その言葉遣いは、この屋敷に住まうものに相応しくありません。即刻改めてください」
そこですか！？
「え、いや、その、俺なんか今失礼なこと……」
「それです！」
ぴしゃりと言い放つ東田叶美さん。
「その、『俺』という一人称は、不適当です！」
「嘘だッ！　というかそれなら、東田の親父さんだって」
「親父さん……？」
「あ、いや、その……」
「母上ッ！」
焦る俺を見かねて、東田が口を挟む。口調が険しい。
「その方は南家の当主！　そのような忠告は不要かと」
「しかし、」

「叶美」

東田の親父さんが、きっぱりと言った。
「彼方くんの口調に関して、我々がとやかく言う必要はない。少なくとも、最低限の礼儀は心得ているようだしね」
「……わかりました……」
渋々引き下がる東田母。
なんか悪いような気がするけど……まあいいか。

なんにせよとりあえず、引っ越しかあ……。

午前中に東田と二人、離れに行ってみた。

かなり長いこと放置されていたためか埃の量は尋常でなかったが、掃除すればかなり快適になりそうな部屋だった。四畳半プラス押入れ、家具は机と椅子、本棚一個のみ。明らかに最近増設したであろうユニットバスがくっついている。

というかなぜ、ユニットバス？

とりあえず掃除をした。ただし、字術で。

これも鍛錬です、と言われて取り掛かったものの、やはり疲労が半端ではない。おかげで午前中で掃除は終わったが、俺はしばらくぴくりとも動けなかった。

「清」とか「潔」とか、どんだけ酷なんだよ。画数多すぎ。字形保つのも難しいし。

それを東田はまあ手際よく、ぱっぱと書いていく。物をどかし、字術を使い、またきれいに配置し直す。プロ級だったと俺は思う。

昼飯――ラーメンだった。意外――をおいしくいただいて、午後。家から必要なものを搬出。

衣類とか、一応の勉強道具とか、本とか、ゲームとか、そういったものを運び出した。全部持っていったわけじゃないから、まあ段ボール三つくらい。

これはなんと、親父さんが車を出してくれた。ミニバンで一発搬送。おかげで楽々。

そのあと、持ってきたものを出して収納して、気がついたら夜だった。重いものは俺がやるし、衣類も基本俺だし、親父さん手伝ってくれないし……ということで、思ったより時間がかかった。俺の土曜日、引っ越しで消滅。

また東田と咲さんと三人で晩飯を食った。やはり旨かった。
そしてまた風呂――ユニットバスじゃない方――に入って、離れに引っ込んだわけだが。
あんまり疲れたんで、ちょっと本読んですぐ寝ようと思って。
俺はこうして、古びた書棚の前に立った、というわけだ。

第二章　鍛えてますから（後書き）

第二章です。
ストックはそろそろ尽きるので、続きは書け次第の投稿です。

第三章　硬質で耳触りな

第三章　硬質で耳触りな

夜――。

「南くん、ちょっとよろしいですか？」
「ん、ああ、なんだ？」
離れで本を読んでいるところに、東田がやってきた。
しかしこの離れ、もともと手狭なうえに家具もいくらかあるので、さすがに二人入るとちょっと狭い。
「ここだと狭いか、むこう移動する？」
「あ、いえ。ここで大丈夫です」
「そうか……」
そうは言ってもなあ……。
狭い室内、十七歳男女、二人きり。
これは――。
いやいや。内心でかぶりを振って煩悩を打ち払う。
「南くん？」
「え、ああ、なんでもない……」
浴衣姿の東田はいつもより艶やかにも見える。
「何でもないって、顔が赤いですよ。熱でも――」
「否！　断じて否！」
東田にというより、自分に一喝。しかし東田はすこし萎縮してしまった！
「……そう、ですか……」
やべえ、なんか俺が悪者だぞこのままだと。
咳払い。仕切り直して、問いかける。
「そ、それで。どうしたんだ？」

「……はい、それがですね」
しゅんとしたままの東田。
「――どうやら西野の軍勢がこちらを取り囲んでいるようです」
ほう。
それ先に言ってほしかったなあ……。
こんなコントやってる場合じゃないんじゃね……。
「……それは、そんなに落ち着いていられるようなことなのか……？」
「いえ、基本は大したことありません。脅しているだけなら。ただ向こうが攻め入ってきた場合、応戦してもらう、あるいは逃げてもらうことになるかもしれないので、覚悟と準備をしておいてください」
「覚悟て……」
覚悟の問題か？
覚悟があれば何とかなるのか？
……とりあえず十手は出しておくか。準備と言ってもそれくらいしかない。
「それでは私は母屋に戻ります。準備も終わっていないので」
「あ、ああそう……」
それでは、と言って東田は離れを去っていった。
嘆息。西野さん何やってんすか、としか言いようがない。
ジャージをジーパンに穿き替える。ジャージだと十手を差すところがないので。
準備体操でもしておくべきか、と思ったところで、

――ズン――

地鳴りがした。
さすがに面食らった。急いで十手を引き抜き、握る。
どうする、待機か、討って出るか。

別に誰かがなにか言ったわけでもないのに、無意識のうちに西野の襲来だと決めつけてしまったようだ。心音が、やけに大きく聞こえ始める。
つう、と汗が頬をつたう。
地鳴りは止まない。

――ズン――

ふと思う。
東田はどこにいる？

母屋か、それならいいんだが。
まだ庭だったら？
今まさに抗争に巻き込まれていたら？

――ズン――

また地響き。
いくら高位の字術士だとはいえ、所詮女子高生、成人男性に囲まれて攻撃されたら――。

「くそっ！」
離れを飛び出す。嫌な想像ばかりが募る。
音は母屋の正面方向。駆け足で建物を回りこみ、そして見る。

スーツ姿の屈強な男性――ヤのつく自由業っぽいお方数十名が、なだれこんできている。手に手に長ドスやらハジキやらをお持ちのようで、武器という武器が月明かりに照らされてぎらついている。
その先頭にいるのは、ひときわ目立つ白スーツの青年。
向かい合うのは、東田家当主、東田汰浪。手には見覚えのある小

太刀。その横には、東田波奈。こちらも小太刀を逆手に持っている。
まさに空気は一触即発。そこにのこのこ入っていった俺、約一名。
会話が続いている。
「――だから何度も言ってるだろう、さっさと帰ってくれよ。当主によろしく伝えといてくれ」
「そうはいかねえ、俺にとってもこの討ち入りは重要だ。あんたの『筆』、もらっていくぜ」
「やらんよ。やるわけないでしょうが」
「じゃあ力づくでもらっていくまでだッ！」
白スーツが右手をさっと挙げる。それに応えるように、背後の軍勢が一斉に武器を構え、戦闘体制に入る。
「南くん、波奈を任せたッ！」
「え、あ、了解！？」
ドン、と東田をつき飛ばし、当主が踏み出す。同時に白スーツが手を振り下し、黒スーツ軍が走り出す。
俺はよろめく東田の手を引いて駆け出す。
角を曲がったところで、東田が手を振りほどいた。
「父上がっ！」
「バカ危険だ、行くぞ！」
「しかし！」
「ああやって指示した以上、きっと何か策があるはずだろ！」
「ありません！」
眩暈がした。
「……ないの？」
「おそらく。あそこで時間を稼ぎ、警察等の到着を待つつもりでしょう」
「んだよそれ……」
勝ち目はないと、そう言いたいのか。
防衛中心の持久戦に持ち込み、タイムアップを狙うというのか。
庭中には、甲高い金属音と重く曇った発砲音とが響き続けている。

この判断は別に、間違ってはいないだろう。
しかし……。
危険だ。いくら当主が強いと言っても、あの軍勢を一人で相手取るのは無理がある。いくら負けなければいいだけとは言っても、さすがに危険だろう。
だが、こうなった以上、引き返すわけにはいかない、ようにも思う。
しばし考え、結論を出し、告げる。
「――作戦に変更はない。東田、行くぞ」
「え、ちょ、ちょっと……」
再び手を引いて走り出す。
ぐるっと迂回し、縁側から屋敷に駆け込む。中には東田母と咲さん以下お手伝いさん数名が身を寄せ合って待機している。
手を放す。
「東田はここで待ってろ！」
反論したようだが、黙殺。というか自分の足音と呼吸音にかき消されて聞こえなかった。ただ、
「土足ッ！」
という東田母の怒号はハッキリと聞こえた。後で拭きます。ゴメンナサイ。
階段で二階へ駆けあがり、窓から門の方を見下ろす。
戦闘の音はすでに止んでいる。
親父さんと白スーツ、それから数人の黒服が残っているだけで、そこかしこに黒服が倒れている。親父さんと白スーツの手には光が灯っており、字術を使ったのであろうことがうかがえる。
あの人数を、倒したというのか。
一人で。
――これが、字術士。
常人には届かない、異常の領域。
俺だって飛び込んだばかり。右も左もわからない、ピッカピカの

新参者（ニュービー）。
だけどまあ、もうしょうがない。
ここまで来たなら、やるしかない！
「うっし……いくぜッ！」

窓枠を蹴って、飛び出す。

無理無理、マジで無理、と叫びたくなる心を押さえつけ、両足で着地。二階からとはいえ十分な衝撃が脳を揺らす。
着地場所は親父さんのすぐ後ろ。悠然と歩いてその左に立つ。親父さんはすでに肩で息をしている。相当きつそうだ。
「チッ、なんだてめえ、たった一人で援軍のつもりか？」
「まあそんなところだな、西野のクソガキ」
「な、んだとテメエ！」
クソガキ呼ばわりは、さすがに頭に来たようだ。まあ向こうの方が俺より背も高いしね。
「……南くん、どういうつもりだい？」
「どうもこうもねーっすよ」
腰から十手を引き抜き、白スーツに突き付けるように構える。
「南家当主、南彼方！　推して参るッ！」

「南、だと……？　馬鹿な。馬鹿な馬鹿な馬鹿なッ！　南は滅んだ筈じゃなかったのか！」
「ここに生きているが？」
「く、そ……、くそっ！」
白スーツが袖で汗をぬぐう。一瞬の静寂のあと、踵を返し、悔しそうに吐き捨てた。
「撤退だ」

「若！」
「撤退だ！」
瞬間、白いフラッシュが目を焼く。
目を開けたときには、白スーツはおろか黒服さんも全員、いなくなっていた。

「ふうー」
どっこいしょとばかりに、どっかりとその場に腰を降ろす親父さん。その横に、俺も座り込む。というかへたりこむ。
「は、ハッタリって寿命縮む……」
心臓バクバクだ。
緊張、なんてもんじゃない。
あそこで退いてくれなかったら、本当に危なかったんじゃないか？
「はっはっは、たいした口上だったじゃないか」
心底可笑しそうに笑う東田父。
「いやあそんな。冷や汗ダラッダラですよ」
冗談抜きで。
「いやいや、さしもの西野も、あれには驚いてたね。……自分たちが絶やしたはずの血脈が、続いていたなんて」
「まあそうでしょうね」
苦笑する。当主とはいえ、字術はほとんど使えないのに。間違いなくあの白スーツの方が強い。
「ネームバリュー、っていい言葉ですね……」
親父さんと同時に笑う。
「さてそろそろ戻ろう。女衆が不安がってるだろうから」
「そっすね」
重い腰を上げ、玄関の引き戸をくぐった。

入った瞬間から修羅場だった。
「南くん！」「南さま！」
二つの怒号。
「あ、そうだった……」
やっぱ、すっかり忘れてた……。
「「あなたは！」」「どうしてそういう無神経なことができるのですか！」「どうして置いて行ったんですか！」
「いや、」
「土足で部屋に入ったのみならず、畳まで土まみれにして！」「私だって戦えます！　甘く見ないでください！」
同時に喚くなよ聞こえねーよ。
参った。頭を掻きながら、こう聞くしかなかった。
「……どうすれば許してもらえるんでしょーか」
まず東田母を見やる。
「そうですね……この際ですから、家中の掃除をお願いしましょうか」
「お、いいねえそれ。助かる助かる。もちろん字術でやってくれよ？」
「まじすか……」
悪乗り親父一名発生。きっついわそれ……なんの罰ゲームだよ……。
嘆息で肯定。……まあ飲まざるを得ないんだよな。
続いて東田娘を見る。
「んで？　お前は？」
なんかすごい、むくれているオーラが出ているんだけど。
「……保留、です」
は？　と聞き返す間もなく走り去る東田。
俺、なんかまずいこと言ったかな……。
「何してるんだい、南くん」
「え、あ、いやその、すみませんというかなんというか」

俺だって困ってるんですが。
「すまないと思うならさっさと追いかけなさい」
「は？」
「行けっつってんだよ、南家ご当主サマ」
東田父はあからさまにやにやしている。母の方も、笑いをかみ殺しているようだ。……何この、シュールな絵は。
これは、行かざるを得ない、かもしれない。
「はあ……じゃ、じゃあ、行ってきます……」
走り出す。とりあえず走り出してはみたものの……。
「……あいつ、どこにいるんだ？」
とりあえずあちこち探す。居間、台所、東田の部屋（さすがに中には入らなかったが）、エトセトラ、エトセトラ。
どこにもいないってどういうことだよ。
「ったく……探させるならもうちょいわかりやすいところにいろよな……」
悪態をつきながら再び庭へ……視界の隅に建物が見えた。離れだ。……いや、まさか。まさかまさか、なんで俺の部屋にいるってんだよ。ありえねー。
「でも一応、ってこったな……」
身体で覚える日本語、シラミ潰し。全部見ておくにこしたことはない。
離れのドアノブを回す——鍵がかかってない。慌てて出たから、忘れたような気がする。
「誰かいますかー、と」
当然、中には誰もいな——いた。部屋の真ん中にちょこんと正座している、東田波奈が約一名。
しばし絶句。
「……い、です」
「え？」
「……遅い、です」

「あ、ああ、すまん……」
え、俺が謝るの？
「んで、なんだ……どうしたら許してもらえますか―、っつー話の続きなんだけど」
東田は口を結んだままだ。
「要はあれだろ、お前も戦える、一人の字術士だ、ってことを覚えておけって話でしょ？」
返事がない。
「だからあれだ……家とかは関係ない、ってことだろ？　当主がいるから、下がっててていいんじゃないかと思ったんだよ」
ただの屍のようだ。
「それに、仮にもというかモロにお前、女子だろ？　さすがに心配だって。って……何とか言ってくれよ」
「……名前」
「え？」
「そう思うなら……名前で、呼んでください……。家とか、関係ないなら」
そういう話なのか……？
まあ……それでこいつが納得するなら、それでいいか。
一呼吸置いて、目を見て告げる。
「あいよ、わかった。そいじゃ、よろしくな、ひが……波奈」
俺としても、若干くすぐったい。
「あ、は、はい。よろしくお願いします」
はにかむ東田……じゃなかった、波奈。
それを見てると、なんかこれで一件落着かなという気がした。
……まあこの戦いも、この選択も、すべて火種に過ぎなかったんだけどな……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7993z/

ある字術士かく語りき

2012年1月6日08時48分発行